

写真人とその本 1 / 赤瀬川原平

日本カメラ博物館 JCI ライブラリー
学芸員 宮崎真二

あかせがわけんべい
赤瀬川原平 (1937-2014) は画家、前衛美術家であり、小説家「尾辻克彦」としても 1981 年に『父が消えた』で第 84 回芥川賞を受賞するなど、様々な分野で活動しました。前衛美術集団「ハイレッド・センター」(1963 年) の際のパフォーマンスなどは、平田実『とび出したアート 1960 年代、若き前衛美術家の足跡とそのプロフィール』(JCI フォトサロン・2005 年) に記録されています。また、町なかで用途を失いながらも存在し続ける階段や扉、煙突などを「超芸術トマソン」と名付けて「無用の長物発見と観察行動」を行い、反骨かつ奇人であった明治の新聞ジャーナリスト宮武外骨の研究、近年では「新解さんの謎」「老人力」など、幅広い分野に対し知的好奇心の網を拡げていました。



『カメラが欲しい』

1986 年に尾辻名で新潮社から発行された『カメラが欲しい』は、『カメラ毎日』の 1983 年 9 月号から 1985 年 4 月の休刊号まで続いた連載を基に、数編を新たに加えて構成したものです。ここには「カメラトピアの牢名主」として、日本カメラ博物館の前身となる「歴史的カメラ展示室」の見学記が収録されています。本文中のイラストや 1988 年に発行された文庫版表紙のイラストも赤瀬川の手によるもので、独特のタッチにはカメラ、特に機構やデザインの美しさに対する深い興味と愛情、そして独自の視点による探究心を感じます。

写真雑誌『日本カメラ』では、1989 年 1 月号から 2013 年 6 月号まで「鵜の目鷹の目」「金属人類学入門」「夢見る軍艦部」「ぼけ味研究」「目の研究」「目の成長」「チマタのカタチ」「目で触る」と題名を変えながら連載を続け、また『アサヒカメラ』では、1996 年 1 月号から 2013 年 6 月号まで 201 回にわたり、クラシックカメラを対象とした「こんなカメラに触りたい」を連載しました。その後両誌では 2016 年 12 月号および 2015 年 4 月号まで再録、復刻連載が続きました。



『散歩の収穫』

このほか写真関係の著書として、『日本カメラ』の連載を基とした『鵜の目鷹の目』(日本カメラ社・1994 年)『金属人類学入門』(同・1997 年)のほか、ステレオ写真への興味からステレオカメラの購入と撮影までを日記風にまとめた『ステレオ日記 二つ目の哲学』(大和書房・1993 年)、カメラと天体観測をテーマとした尾辻名での小説集『ライカ同盟』(講談社・1994 年)、写真集として『正体不明』(東京書籍・1993 年)、『散歩の収穫』(日本カメラ社・2010 年)などがあります。